

## 郷土研究と故郷場学長

田名部貞宣

昭和三十三年十二月十五日郷土の大先輩郷場学長は忽焉として永眠された。こゝに故郷場の在りし日を郷土研究との関連において偲んでみたい。

学長の郷土研究はすべてこれ郷土愛より発せざるは無かつた。「東興文化」創刊号において「之等の事物は日常の生活とは繋がりは少いが、地方発達の由來と特色とを明にし、啓発する所甚だ多く、郷土愛の涵養にも極めて意義深いものがある。」旨を力説して文化財の保護を強調しておられるが、昭和二十九年五月文理学部で開かれた東北史学会春季大会の冒頭における歓迎の辞にも郷土の美を讃美し披露してをられたことがまざまざと記憶に残っている。

学長が幼少より趣味とせられ逝去されるまで愛玩已まなかつた横笛等も皆郷土に古より深く根を下した民俗に由來するもので、これ等古來の民俗民芸等に対する愛着については弘前図書館報「は

と笛」や六号に「鳩笛の想起」と題して往時を懐しんでをられる。横笛と関連して正統ゆふたばやし、津軽神楽、南部切田神楽の保存にも異常な熱意を示され、機会ある毎にこれらの発表会に出席してをられた。

しかし学長の郷土研究は單純な懷古趣味から出たものではない。曾て一部市民の間に津軽爲信の銅像復元の話が持ち上つた際には、これを苦々しいことゝされ或る意味における民度の向上の必要を説かれるのを筆者は耳にしているのである。

昭和三十年六月青森県文化財保護協会が設立され学長はこの会長に推戴されたが單なる形式的な名誉会長では無かつた。進んで會員の普及獲得に積極的に努力され、同会事業の一である県内文化財めぐりには殆ど欠けることなく参加し、謙虚な一會員として熱心に觀察され又説明者に耳を傾けられた。従つて学長の常に語られる史談は机上の空論は一つとして無く、すべてこれ実地踏査の結果に基く実証的且科学的なものであつた。我々が單に文献上においてのみ有する知識では学長の實

見上の所論には到底太刀打出来るものでは無かつた。植物学者として又山岳家として県内殆ど足跡至らざるなき学長としては、郷土研究の面においてもこの点は何よりの強味であつたろう。郡場家の祖先の調査結果を掲載した「尾崎村誌」をよく精読してをられたが、学長はこれに満足せず余暇をさいて現地を隈なく視察されたのもやはり同じ精神のあらわれであつたと思う。

学長は又本年八月「国史研究」第六号に「郷土の陳古」と題する一文を寄せられた。これは長文のものでは無いが、青森県の国土形成の始まりより徐々に現代の地形に改まり有史時代に及ぶ自然の変遷を地質学、考古学更には民俗学的観点から論じた頗る科学的な所説であり、所謂職業郷土史家の企て及ばざる盲点をついた大局的立場からの所論であつて、斯界に対する斬新な示唆を与えたものどゆうべきであらう。

郷土をこよなく愛し、晩年を郷土に捧げた郡場学長今や亡し。筆者にとつてはあの謹厳且温情に溢れた博士の姿が今も尚そこに在るような気持を

如何ともすることが出来ない。たゞたゞ御冥福をお祈りするのみである。